

平成 30 年 6 月 1 日現在

機関番号：32608

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2017

課題番号：16K16759

研究課題名(和文)「軍記物語史」構築のための基礎的研究

研究課題名(英文) Fundamental research for building "history of military tale"

研究代表者

原田 敦史 (HARADA, ATSUSHI)

共立女子大学・文芸学部・准教授

研究者番号：90584657

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：軍記物語の諸本は、その描く世界も、表現も、異本相互の関係も、それぞれの作品ごとに多彩で複雑である。しかし、古態といわれる段階から、詞章の洗練された、広く読まれるテキストが立ち上がってくる過程には、複数の作品を通じた共通性が認められる。古態本の世界を支えていた構造が大きく解体され、変形され、新しく歴史を描き直す物語が作られてゆく。本研究では、類似した過程を経て物語が生まれ変わってゆく様相を、複数の作品にわたってとらえることができた。軍記物語の諸本流動を文学史的な視野から理解するための基礎となる成果である。

研究成果の概要(英文)：The books of military stories are diverse and complicated for each work, the drawing world, the expression, and the mutual relation of different works. However, from the stage when it is said to be in the old style, in the process of sophisticated, widely accepted text of the lyric chapter comes up, the commonality through multiple works is recognized. The structure that supported the world of old style books is largely dismantled, transformed, and a new story is drawn to redraw history. In this study, we could see the appearance of a story reborn through a similar process over several works. It is the foundation for understanding various books of military stories from the viewpoint of historical literature.

研究分野：日本文学

キーワード：軍記物語 中世文学

1. 研究開始当初の背景

多様な諸本の存在は、軍記物語研究の最大の課題である。現在では、各作品において古い形態をとどめている異本を見出そうとする研究に関しては一定の共通理解が得られたといえるが、その一方で、古態と認められた異本ばかりに研究者の関心は集中し、その一面を思想史や宗教史の側面から切り取って資料的連関を明らかにすることに多くの力が注がれている。その中で、諸本の流動を総体的にとらえるような発想は不足しているのである。

一つの記事が書かれた文化的背景についての研究は飛躍的に進んでいるが、異本を一つの作品として読み解く論も、そうした異本が多数生み出された意味を問うことも、十分にはなされていないということである。このような現状において、質・量ともに多種多様な諸本の存在をどのように理解するかという考察は、立ち後れてゆくようである。

2. 研究の目的

上記「1. 研究開始当初の背景」に述べた問題を克服するために、諸本流動という動態を一つの文学史としてとらえることが、本研究の最大の目的である。軍記物語の流動という大きな現象を、中世文学史の中に定位するための基礎とするためである。そのために、古態とされる段階から、「洗練」を謳われる諸本が生みだされ、受け継がれてゆくまでに、どのような過程があったのかを明らかにする。『平家物語』の語り本系諸本、中でも特に覚一本のように、文学的に優れた詞章を持つとされるテキストは、『保元物語』や『平治物語』『承久記』といった他作品の諸本のうちにも見出すことができる。これら複数の作品を対象として、その変容のあり方をとらえ、比較対照することで、軍記物語の諸本流動史という現象を理解してゆきたい。

軍記物語の研究が、文化史研究の中に解消していつてしまうことのないよう、しっかりとした土台を構築したい。

3. 研究の方法

文学史的な視野に立って研究するために、諸本それぞれの世界を綿密に読み解いてゆくことが、第一に必要な。特に、洗練された詞章を持つテキストが、その前段階と見なされるものに対してどのような違いを見せるかを、各軍記作品ごとに明らかにする必要がある。

次いで、それら諸本の本文がどのような関係にあるのかを、従来の議論以上に細かく明らかにしなければならない。特に『平家物語』に関して、語り本の成立までにどのような過程を経ているのか、語り本の祖型はどのように想定できるのか、これらの問題は従来は延慶本という一本のみとの関連で論じられることが多かったが、他の諸本との関連をじっくりと視野に入れて行われた考察ではな

い。そうした問題に焦点をあて、これまでの研究を再検証してゆく。語り本の文学としての特質を見定める上での不可欠の作業として、語り本が、どのような『平家物語』を源として作り上げられてきたのかを知るためである。

これらの作業を経た上で、一つの作品に関して得られた成果を、他の軍記作品と対照させる。『平家物語』の流動が、『保元物語』『平治物語』の場合とどこまで似ていてどこが異なるのかを考える。特に、複数の作品にわたる共通性を見出すことに、重点を置きたい。

4. 研究成果

本研究における『平家物語』に関する成果の第一は、巻五の富士川合戦譚をめぐる考察である。初年度に口頭発表、次年度に論文が公刊された。語り本系の富士川合戦では、水鳥の羽音に驚いて逃げてゆく平家の弱さは、没落する彼らの運命を象徴的に予告している。相手の姿を一度も実際に見ないまま、脳裏に描いた敵に怯えて逃走してゆく様を、語り本系の中でも特に覚一本はよく描いている。だが、延慶本などの読み本系諸本は、長大な頼朝拳兵譚を有している点において、語り本と決定的に異なっている。拳兵から短期間で関東を席卷して平家を迎え撃つに至る頼朝の軍勢は、確かな存在感をもって平家と対峙する。読み本系は、平家の敗北とともに源氏の勝利をも等分に描くのである。

両者の差違を以上のように整理すると、覚一本のような表現が磨き上げられてゆくまでの過程とは、読み本系的な物語からの変質であったと考えることができる。延慶本の中には、東国武士の強さについて語る実盛の発言や、源平双方の描写に関して用いられている将門関連記事など、富士川合戦譚中に、拳兵譚との照応のもとに表現されたと認められる記事がある。拳兵譚と富士川合戦譚は、互いに照応しながら、両軍の勝敗の分かれ目がどこにあったのかを、双方の戦略や過去の歴史などから明示してゆく。一方の語り本には、拳兵譚はない。語り本において、拳兵譚からの脈絡を失った上記の記事は、一部のみが切り出されて、平家の弱さがその後の暗い未来を象徴的に暗示するという新たな文脈に合わせて再利用されている。以上のことから、語り本系は拳兵譚を有する本文を大胆に刈り込んで再編して作られたものであることが明らかとなるのである。

『平家物語』についてのこの成果を、同じく初年度に論文化した『保元物語』に関する考察と対照させてみると、視野は大きくひらけてくる。『保元物語』において、文学的評価の高い第四類本は、古態とされる第一類本を大きく書き換えることによって成り立っている。従来、四類本は単に「洗練された」という言葉で言いあらわされることが多かったが、その生成は、物語の構造の大きな転換を伴っていたのである。それは、一類本の

世界を支えていた柱である為朝の造型を抜本的に改めることによって行われている。一類本の為朝は、一族の枠内にも、また王土にすら収まらないその強さゆえに、骨肉の争いの中で滅びた者たちとは違う地点を生きた。その力に瞠目することが、一類本の歴史への認識でもあった。それが四類本では、為朝は常に父と協調関係にあり、王権を敬う。こうした状況が描かれる場面全てを、四類本は綿密に書き換えているのである。その変質は、常に敵対した兄義朝と対峙する場面において、発現する。そして、いつか朝家の守りとなる可能性を予告されながら退場していく。鬼ヶ島での悪行から滅びに至る記述はすべて省筆されており、一類本から四類本への転換が、物語の掉尾の形さえ変えたことがうかがわれる。その中で為朝は、平治の乱で滅びた兄義朝とは対照的に、いつかひらけてゆく源氏の将来を照らし出す存在となっているのである。

『平家物語』と同じように、『保元物語』においても、文学的に洗練されたテキストが生み出されるに至るまでには、物語の構造の抜本的ともいえる改編があった。それは、研究代表者が過去に明らかにした『平治物語』の場合（四類本『平治物語』論、国語と国文学、2014年7月）とも類似するはずである。大きく構造を変化させながら、敗れた側にとって、その出来事がいかなる意味を持っていたのかを描き直すのである。このような見取り図を提示できたことは、本研究の大きな成果である。近年の研究では、上記軍記作品は、古態と認められる段階において、類似性よりも異質性のほうを強調されることが多くなっている。推定される成立年次も近接しており、相互の影響関係も希薄である。そのため、『平家物語』を頂点として作品名をただ並べてゆくだけの「軍記物語史」は成り立たないとされており、そうした理解は、おそらく正しいだろう。だが、そうして成立した諸作品が、諸本流動の中で新たな物語を生み出してゆく際には、類似した過程を経てゆくのである。その変容の歴史を束ねてゆくことこそ、軍記物語の流動を文学史としてとらえてゆく基礎となる。作品名を並べてゆくだけの文学史は成り立たなくとも、その諸本流動の歴史に筋道を見出すことが可能となるのである。そうした改作を促した力は奈辺にあったのか、他の中世文学との関連はどのように考えられるのか、より広い考察が、今後可能となることが期待される。軍記物語史を諦めて個々の記事の文化的背景をのみ問うような考察が増えている中で、本研究の主張する大きな成果である。

また、『平家物語』に関する第二の成果として、二年目に公刊した巻九の小宰相身投に関する論考がある。覚一本、延慶本がそれぞれに描くすぐれた表現の世界と、より古朴とみなされる諸本のありようを明らかにし、それらを集成したかのような体裁を持つ『源平

盛衰記』についての考察を行った。小宰相は、夫通盛が戦死した前夜、二人の最後の逢瀬の際に、死の予感を打ち明ける通盛に対して死後の再会を契る言葉をかけてやらなかった。あれが最後だとわかっていたら後の世を契ったのに、という一念は、小宰相にとって痛恨のものである。延慶本も覚一本もこの点に焦点をあわせ、それぞれにすぐれた世界を描き出している。あのおとき契っていたら、生まれてくる子とともに小宰相がこれから生きるせめてもの支えになったかもしれないと描く覚一本、もし契っていたら、小宰相がいつか再婚してしまうのではないかと不安がる夫に、来世まで変わらぬ愛を誓ってやれたはずだと歎く延慶本、双方の文脈は異なるが、両者の差違は二人のなれそめを描く記事をどこに置くかという配列の問題とも連動しながら、それぞれの文脈を作り上げている。

それらとは別に、「あのおときが最後だと知っていたら」とも、「後の世での再会を契ったのに」とも描かない、南都本や四部合戦状本、『源平闘諍録』のように、古朴と目される諸本の存在もある。そして『源平盛衰記』は、それら複数の先行本文を参看した形跡を明らかに残しながら、そのいずれとも異なる世界を志向している。あれが最後だと知っていたら契ったのに、という強い後悔が、小宰相を身投げへと向かわせたのではない。小宰相の目は、その先の将来に向けられている。大切な人を失ってもなお生き続けなければならない人生の苦しみを思うゆえにこそ、小宰相は船から身を投げた。『源平盛衰記』は、先行本文を切り貼りしつつ、新たな物語世界を描き出している。その様相をとらえ得たことは、同じように複数の本文をつぎはぎするようにして成り立っている、各軍記作品の後出諸本の生成を考える上での、一つの重要な視点となりうるものである。特に、『保元物語』や『平治物語』の流布本と呼ばれる諸本は、先行する諸本の本文を切り貼りしている様相が顕著である。それらのテキストを読み解いていく上で重要な視座が、本考察から得られたと考えている。

上記のような作業と並行して、綿密な本文研究の観点から、各諸本の間を精緻に見定めていかなければならない。本研究では、『平家物語』に関して、従来漠然と「延慶本の本文」から語り本が成立したと理解されてきたことについて再検証する作業も行ってきた。かつては延慶本の古態性は他諸本に対して優位にあるものとして認識されていたが、現在ではそうした考え方は揺らいでいる。延慶本の中にも後次的な改編を経た箇所は少なからず見出されることが、相次いで指摘されているのである。にもかかわらず、語り本の成立を考える際には、「延慶本の本文」との関係という枠から抜け出た考察が行われることはほとんどない。現存延慶本本文の瑕瑾が指摘されたとしても、その祖本に対する信頼は依然として厚い。しかし、語り本の成立

は、延慶本のみならず他の読み本系諸本の本文をも参照して考えなければならない。そうした考察のための重要な例は、巻三の鬼界島流人譚や巻十一の屋島合戦譚などに複数見出すことができる。巻九の一の谷合戦譚に関しても、同様の問題を多数指摘できる。いずれも、近く公刊を予定している成果である。綿密な本文研究から語り本の成立を考えることは、近年では活発とはいえない分野だが、祖型の姿をできるだけ詳しく見定めてゆくことは、語り本がいかなる意匠によって生み出されたのかを知るために不可欠である。こうした作業の積み重ねも、文学史的な研究の基底を支えるものとして、今後も継続していかなければならない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

原田 敦史、『四類本『保元物語』論、岐阜大学国語国文学、査読無、第四十一号、2017、pp.17-30
<http://repository.lib.gifu-u.ac.jp/handle/20.500.12099/56139>

原田 敦史、『平家物語』富士川合戦譚考、国語と国文学、査読有、第九十四卷第八号、pp.17-34

原田 敦史、『小宰相身投考』、共立女子大学文芸学部紀要、査読無、第六十四号、pp.51-62
https://kyoritsu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=3265&item_no=1&page_id=28&block_id=27

〔学会発表〕(計 1件)

原田 敦史、『平家物語』富士川合戦譚考、軍記・語り物研究会大会、2016.8.26、中京大学(愛知県)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

原田 敦史 (HARADA, Atsushi)
共立女子大学・文芸学部・准教授
研究者番号：90584657

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()